

床に入ろうとしたとき、二十四坑道全員集合の命令が出た。身支度して出ようとしたら中止とのこと。坑内が爆発したが入坑不能とのこと。

翌日坑内に行つて見たが、驚いた。厚さ一寸ほどもある鉄板が飴のように溶けている。爆発の原因は電気スイッチのスパークによる炭じん爆発だったが、これも入坑中禁じられている日本人のタバコの火ということになった。ここでも捕虜の身のつらさを痛感した。

亡くなった人たちには気の毒だが、もしあの爆発が二時間早かったら、今の私はない。戦後最初から坑内作業で抑留三年間事故なく帰国した者、初入坑当日爆死した者、これも人生の奇遇か運命か。あのころのことが脳裏に浮かぶ。

シベリア抑留体験記

島根県 阿部 光明

昭和二十年八月九日一時ころより空襲警報の発令も

なく突然爆裂音が聞こえた。それは暁部隊北鮮羅津通信所のある近くの朝鮮軍材料置き場の大爆発である。

それまではB29の偵察程度のことにはあり、米軍機かと思つたら、夜が明けるとソ連機であることがわかつた。目と鼻の先のウラジオストクからの爆撃は一日じゅう続き、八月十日、羅津の港の艦船は全部撃沈された。八月十二日、空襲の激しい羅津をあとに中隊本部と通信所は南下した。昼は空襲が激しいので夜の行軍である。八月十五日、清津へ敵が上陸したとのことであり、十七日、散兵戦をしき敵と白兵戦をすることになった。十八日、羅南の弾薬庫の爆発で大音響が聞こえた、我が友軍機の姿は一機もなく、何の抵抗もない敵は我がもの顔に徹底的に爆撃し続け、口惜しく、情けないが逃げるに精いっぱいである。午後二時ごろ戦争は終結したとのことで、羅南を撤収し吉州方面へ転進せよとの命令である、しかし我々兵には何が何だかさっぱりわからなかつた。

八月二十日、着剣して皇居を遙拜拝し涙を流しながら菊の御紋を削り、一か所に集め焼却処分した。日本

は負けたのだ。

北鮮の要塞も二三日で影形もなくなつてしまった。

八月二十二日南下したソ連の大型戦車が北から追いかけてきて、整列させ、銃をつきつけ手を挙げさせ、中隊ごと捕虜としてしまった。そして時計、万年筆、その他貴重品を取り上げてしまった。口惜しさと腹立ちさはどうするもできなかった。我が国の軍隊は捕虜を戒め捕虜とならば舌をかんで死ねと教育された、軍人精神も旺盛である。しかし、終戦で丸腰の部隊全部となれば致し方ないことである。

それから各部隊が次々合流し、厳しい監視のもと食糧も満足に与えられず行軍して北上し、陸軍羅南練兵場に着いた。汚れた衣服に身をまとつた避難民や負傷者、乞食のごとき日本人でこつた返していた。まるで生き地獄である。初めて敗戦のみじめさをつくづく感じた。

集結した兵は三千人と聞いた。九月五日練兵場をあとに咸興への行軍が始まった。川原のころころした石を枕にして土の上で夜営し、食糧も乏しく、歩きなが

ら列を離れて野菜果物を取つては監視兵に撃たれて死ぬ者、朝鮮人に袋だたきにされる者、昨日までの同胞も打つて変わった。行軍も一週間目、食糧不足と疲労で落伍者も始めた、お互いに励まし、助け合つていたが、九月五日、難所といわれる摩天嶺という山を越した、曲がりくねつた坂道を上り足の痛みをこらえ、下山するまで一日半もかかった。苦しい苦しい難行軍である。九月十九日一か月余りに及ぶ食うや食わずで北鮮日本海側の行軍は終わった。雨にぬれ、風に吹かれ、長い長い野営の日々だった。

咸興中学に着いた。それから船の積み込み作業、その他の使役に出た。そして、大豆、乾魚、食べられるものは何でも隠して持ち帰り食糧不足を補っていた。

監視は厳しく歩哨は常に我々に目を光らせていた。十二月二十八日、みすほらしい地獄船かと思われる貨物船に三千人、馬もろともに乗船した。ソ連兵は東京ダモイと口々に話していたので、帰国と信じて皆こおどりして喜んだ。舞鶴か仙崎か、小樽か、皆の顔は明るく正月は家族とともに故郷で迎えられる。お雑煮や銀

飯が腹いっぱい何年ぶりに食べられる。もう心は内地への帰り話に花を咲かせた。船は出港し北へ北へと進んだ。山は左に雪をすっぽりかぶっている。いつか進路を南へ向けるだろうと思つた。三十一日ウラジオ港へ入港した。油の補給と思ひ、皆ハッチへ上り、初めて見るソ連の港のめずらしさを眺めた。やがて集合がかり、捕虜として沿海州でしばらく労働するとのことである。みんな気を落とし狂わんばかりの人々もいた。いつ帰れるか、死ぬか、夢も希望も一ぺんに吹き飛んでしまった。

一月三日、ウラジオ港を出た船はへさきを北へ北へと向け、寒々とした沿海州の冠雪した山を左に見て進んだ。

十四日、ソフガワニ港沖に船はいかりをおろした。港内は凍結して入ることができないので、そこから歩いた。夜中零下四十度くらいあろうか、空腹で六キロ、落伍者も出て苦しいものだった。着いたところは丸太を組み合わせてつくつた二階建てである。燃料もなく、寒くて眠ることもできず、むなししいものだった。

それから数日はまき取り、便所つくりをした。一番寒いときで土は数メートルも下まで凍り、雪は結晶して軽く風に吹かれて飛んでしまい、余り積もらず湿気は少なかった。大小便すればすぐ凍ってしまう。寒いというより痛い。

毎朝点呼があつた。五人ずつ並んで縦隊であるが、暗算ができぬので何回も何回も数えては間違える。寒いのに大変である。足踏みをして苦しさに耐えた、それも長時間かかるのである。日本人ならすぐに終わってしまうのに情けないことである。

二月一日より作業が始まつた。製材所と伐採である。伐採は峠を越して五、六キロくらい先である。直径一メートルくらいのエゾマツ、トドマツ、そしてもつと小さいシラカバの木を切るのであるが、鋸は二人で押したり引っぱったりして両側について切り倒すのであるが、要領が悪く呼吸が合わず大変。なれるまでは苦勞した。ノルマが課せられ、切つたものを集めて山に見てもらふのである。寒さは厳しく常に食糧不足で腹は減り、凍傷の恐ろしさが常につきまとつた。栄養

失調とビタミン欠乏が日が経つにしたがつて現れてきた。齒莖がはれ、目は赤く充血し、体中へ黒いはん点ができて、常に体は浮いたようで、何かにつまずくとすぐ転んでしまう、全く半病人のごとくになってしまった。白血病かもしれない。次々と病人が出て、赤痢となり、血便を出して毎日毎日たくさんの人が故郷を懐かしみつつ死んでいくのである。いつ自分の番かと不安になってくる。帰国のめどは立たず、給与は黒パン三百五十グラムだそうである。それにスープである。常に腹は減り、パンを切ってはくじ引きジャンケンをし、スープは手製のはかりで計ったり、わずかなことでけんかをしたりする、衣食足って礼節を知る人間も最低となれば浅ましいものである。生か死かの分かれである。風呂は一週間に一回、民間人の共同浴場で、むし風呂のおけ一杯の水でカラスの行水とはこのことで、温まることもできない。

二月ころより思想調査が始まり憲兵、警察、特高、裁判所関係者、その他は調査対象となり転属して行く。いずれ厳しい取り調べを受けるであろう。また行動に

よつては反動と密告され、恐ろしいことになる。思想かぶれが幅を利かせ始めた。やがて日本新聞が届くようになった。記事は日米反動とか共産主義礼賛である。労働歌の合唱が強制された。全く意に沿わぬことばかりであるが、生きるため、帰るためには致し方ないことである。

五月、港の水も解け始め春がやって来た。シラカバの木より樹液を取って飲んだり、山に赤い実のなる草がありビタミンCと名づけ取って食い、蛇、アブ、キノコ、何でも食べて腹を満たした。製材所へ作業に行き、山で木を切り川へ流し貯木場へベルトコンベアで上げて製材するのである。日立製作所のモートルがあり非常に懐かしかった。木材は無限で、原始林を切り川へ流すが、とまつてたまったのを掘り起こし、また流す作業もある。あるときは魚加工場で作業をした。腹をあけて臓物と卵を取り出してベルトコンベアで魚を送り、サイロに塩漬けをするのである。北の海は魚の宝庫であることをつくづく感じた。帰りにには袴下の中へ隠し、歩きにくいを持って帰るのである。見つか

ればバスサーチ（管倉）である。たたかれることもある。しかしみんなで分け合って食べる喜びが何にもたよえようがない。いつも腹は減り、体は疲れ何の楽しみも希望も喜びもないが、月日は経ていく。

伐採に行き、針金で釣針をつくり、ロープをほぐして糸をつくり、川へ上るサケ、マスを引つ掛けたり、船の作業に行き、アンコのような大きな魚を釣り持って帰ったり。五葉の松笠を取って焼いて食べた。食うことにだれも心を配った。体も気候に次第になれば、生環境もやや落ち着いてきた。しかしシラミが大繁殖してやせた体につき、血を吸い、安眠できぬようになった。ドラム缶で衣服を煮て消毒するのである。月に一回の身体検査があり、女の軍医が尻をつまみ肉づきで健康のランクを決めるのである。

そのころおぼれる者はわらをもつかむのたとえのごとく、コックリさんというまじないがはやり出した。塩と魚を供え、紙にイロハニホヘトと書き、目隠しをして願いごとを小さい木で字をあて、その字を綴って気休めにするのである。寝床に入っては隣の人と每晚

每晚、白米の銀飯、ぼたもち、その他のおいしい食べ物のごばかりで腹はグウグウと鳴ってくる。

一冬過ぎたが帰れる気配は一つもない。兵や民間人はよく働く者が早く帰れると言って働かせようとする。二十二年六月だったろう、船の積み込み作業に行つた数隻の中の一隻が、春が来た春が来たと言謡を流していた。非常に懐かしく私たち数人は涙を流し喜んだ。負けても日本はあるのだ。非常に力強くなってきた。死ぬ人も少なくなり、弱い人は気の毒に犠牲となつて死んだのだ。

期日ははっきり覚えぬがザロトイ収容所へ転出した。その収容所は伐採専門で、山の奥深く千人の人員中四百人が死に、その補充で強制労働の厳しい日々が続いた。二十二年十一月ダモイを口実にソフガワ二港を出港しウラジオ港に行き、四十七地区スーチャン収容所でまた伐採である。仕事も厳しいが民主化と稱し、反動者と目をつけられればどこかへ転出され、いつ帰れるかわからぬ。抑留者の同士討ちで、赤化の洗礼を受けた恐ろしい者がいるのである。

晴れた夜の星は内地で見ることのできぬほど美しく、北斗七星、北極星は本当に近く見え、余計に郷愁を覚えるのである。また緯度が北へ寄れば寄るほど夏は昼が非常に長く、冬は夜が長いのである、暗いうちに出て、暗く帰る寒さは厳しく、野山の食うものはない、冬の捕虜はむなしものである。九十人の収容所でここで二十三年五月七日まで作業をした。

ようやく雪も解け、木の芽のふくらむ八月、ダモイ、ダモイと言うソ連人の言葉を半信半疑で聞き、ナホトカに出て乗船を待った。十日、港のはるか外に日章旗をひるがえした日本の船が迎えにきているのではないか。感慨無量である。待ちに待った、夢にまで見た帰国である。しかし船に乗るまではいつ引きとめられるかわからない。身体検査を受け次々と小舟に乗って本船に近づいた、フジの花を飾り、横断幕がおろされた。「皆様長い間大変ご苦労さまでした、乗船して昔なつかしい日本茶を召し上がってください」と書いてある、船名は恵山丸である。

無事乗船した。船員そして看護婦、三年近くに見る

日本人々である。うれしさ、懐かしさ、何にもたてえようはない感激で胸いっぱいである。思えば捕虜として三年近い長い日々を飢えと寒さ重労働を耐えて、今開放され父母、肉親の待つ祖国の土を踏む現実となつたのだ。航海も無事、十四日かすかに内地の山々が見え始めた。全員デッキに上がり久しぶりに見る日本の山を懐かしく見た。船は次第に近づき、緑の美しい山ははっきりと見える。やがて棧橋に近づき出迎える人々の影もはっきりとわかるようになった。手を精いっぱい振った。検疫を終わり、上陸した。日本の土を踏みしめたのである。舞鶴港である。この喜びは一生忘れることはできない。私は不幸にも栄養失調で舞鶴国立病院へ入院した。しかし抑留中多数の戦友が亡くなられたことを思うと胸いっぱい悲しかった。